

# ドナウ の 四季

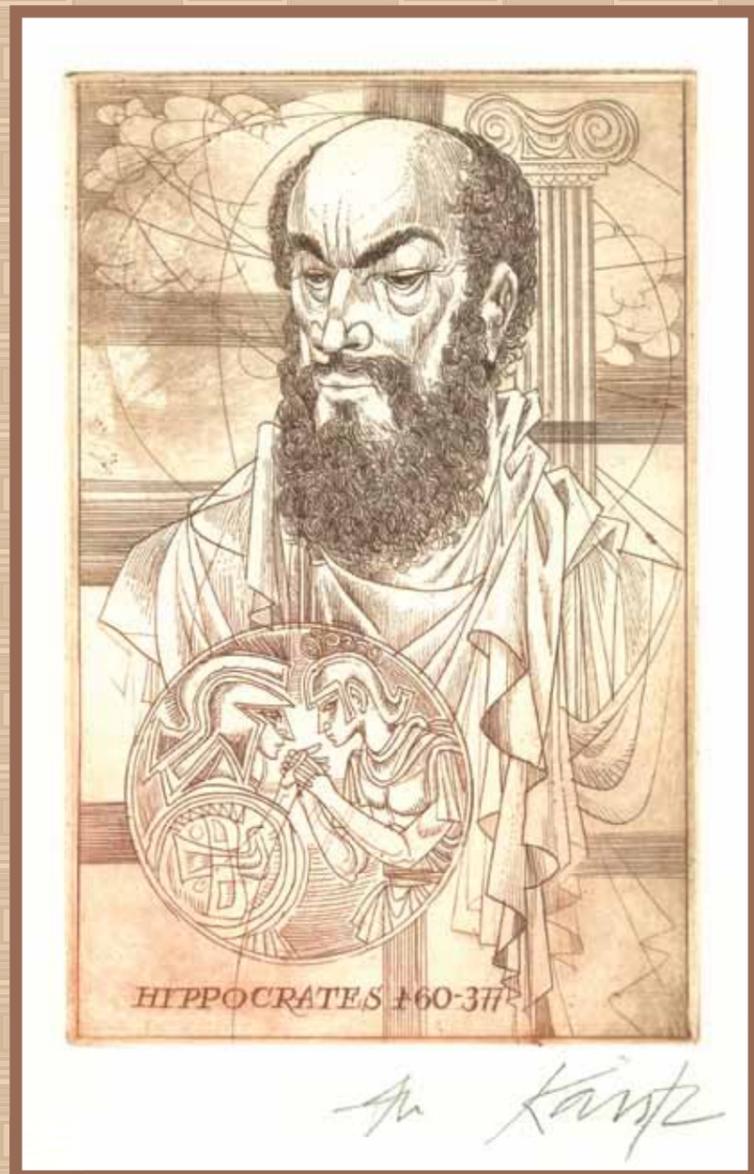
2012年・春季号・No.14

気になること	盛田 常夫	1
私とハンガリー	高根 友光	2
近況	倉林 義正	4
冬のハンガリー訪問記	和中 帛子	5
森林・狩猟専門鑑定人	森田 友子	6
アニマ・ムジツェ室内合奏団	井上 奈央子	7
東京アールハーズ	仲川 寿一	8
読書のススメ	野呂 依子	8
緑の丘日本語補習校	桑名 一恵	9
私のボランティア体験記	ハーモシユ・エステル	10
見えない「しめ縄」	ベシエニエイ・バラージュ	11
留学生自己紹介	若杉 百合恵	12
留学生自己紹介	久野 絵美	13
リスト音楽院留学生コンサート情報		14
欧州スポーツ情報	盛田 常夫	15
スポーツ行事・運動サークル情報		16

# 腫瘍温熱療法—オンコサーミア

Heat Therapy in Oncology — Oncothermia

ハイパーサーミアの新パラダイム  
New Paradigm in Hyperthermia



サース・アンドラーシュ／盛田 常夫著  
By Andras Szasz and Tsuneo Morita

出版: 日本評論社  
予価: 3600円  
6月上旬刊行  
主要書店か  
Amazonで購入可

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価 | 第4章 腫瘍温熱療法          |
| 第2章 ハイパーサーミアの物理学   | 第5章 オンコサーミアの理論と方法   |
| 第3章 ハイパーサーミアの生理学   | 第6章 自然療法としてのオンコサーミア |

## 気になること

盛田 常夫

1月9日、FIFA年間表彰式が盛大に開かれ、各部門の最優秀賞が授与された。個人賞など日本人にはほど遠いと思っていたが、昨年の「なでしこジャパン」のW杯優勝で期待が高まった。女子監督賞は圧倒的な得票で佐々木監督が受賞し、女子最終選手賞も沢穂希が見事受賞した。男子の受賞者はメッシである。日本サッカー協会がフェアプレー賞を受賞し、世界が注目する晴れ舞台で、日本人が三度も壇上に上がるという「日本デー」になった。東日本大震災への思いやりも加味されたかもしれないが、自他共に認める受賞であったことは間違いない。

この表彰式は1年間の最優秀選手や監督を選ぶFIFAの年頭行事であり、世界のサッカー界を代表する選手や監督が一同に介する華麗なセレモニーである。全世界にマナ中継され、億を超える世界のサッカーファンが楽しみにしている瞬間だ。

セレモニーはEurosportで世界に放映され、ハンガリーでは英語・仏語・スペイン語ができるアナウンサーが受賞者の言葉をハンガリー語で伝えていた。日本出発前のインタビューで、佐々木監督は「受賞できたら、あっと驚くパフォーマンスをする」と答えていた。だから、期待していた。ところが、最初に登壇した佐々木監督は日本語でしゃべり出し、その途端に会場がざわめきだした。会場には同時通訳機器が用意されていたが、短い英語スピーチが主なので、ほとんどがイヤフォンをもっていなかった。TVも通訳を用意しておらず、ハンガリー人アナウンサーは日本語なので通訳できませんと、映像をそのまま流していた。イタリアではすぐにスタジオ画面に切り替えられたという。なんとも残念なことである。沢選手も同様に、日本語スピーチだった。日本の新聞には「日本語で堂々とスピーチ」という記事もあったが、日本人以外に誰も理解できなかった。数千万あるいは数億の世界のサッカーファンが注目しているセレモニーである。晴れの舞台で世界に日本のメッセージを伝えるチャンスをみすみす失った。震災復興にたいする協力への感謝

の言葉もあったのだから、きちんと世界に伝えたかった。これは明らかに日本サッカー協会の失策である。佐々木監督と沢選手の受賞確率はかなり高かったし、セレモニーの日まで十分な時間があつた。サッカー協会は事前に専門家を手配し、入念に英語スピーチのトレーニングを施す必要があつた。沢選手だって2年間もアメリカでプレーした経験がある。簡単なスピーチができなければ、名実共に一流選手の仲間入りはできない。プロテニスツアーに参加する選手は記者会見の出席が義務づけられ、通訳なしで受け答えることが要求されている。優勝インタビューも必須の条件である。国際舞台で活躍することは、こういうセレモニーでの仕事を含めてのことだ。

の言葉もあったのだから、きちんと世界に伝えたかった。

これは明らかに日本サッカー協会の失策である。佐々木監督と沢選手の受賞確率はかなり高かったし、セレモニーの日まで十分な時間があつた。サッカー協会は事前に専門家を手配し、入念に英語スピーチのトレーニングを施す必要があつた。沢選手だって2年間もアメリカでプレーした経験がある。簡単なスピーチができなければ、名実共に一流選手の仲間入りはできない。プロテニスツアーに参加する選手は記者会見の出席が義務づけられ、通訳なしで受け答えることが要求されている。優勝インタビューも必須の条件である。国際舞台で活躍することは、こういうセレモニーでの仕事を含めてのことだ。

日本サッカー協会は選手のスピーチマナーや語学能力の向上に力をいれるべきで、それに必要なお金を惜しんではならない。国際感覚のある人材を積極的に協会に入れて、国際化への対応を図るべきだ。サッカーだけでなく、日本のスポーツ界はこういう国際化への準備ができていない。初歩的な国際感覚が欠けているから、国際機関で重要な役職を得ることもできない。

それにしても、日本人の発音は悪い。しかも、日本語でも明確に区別される音を区別せずに発声するから、なおさらだ。日本ではメッシと表記されるが、実際の発声はメッシである。日本語でも「す」と「し」は明瞭に区別される音だ。外人が「寿司」を「しし」と発声したら、何を言っているのか理解できない。「スリ」なのか、「しり」なのかも区別がつかない。「す」と「し」を区別しなければ、日本語でも英語でも理解不能であることに変わりはない。「メッシ」を「メッシ」と発声するのは、「メス」を「メシ」と発音するのを同じことだ。日本人は「アイ・シー」と発声する。これを英語に直すと、I seeである。これでは理解不能。I seeと言いたければ、「アイ・シー」と発声しなければならぬ。sheepとseeの違いは中学校英語の基本。「シープ」と「シー」が区別できなければ、

ば、「す」と「し」を区別せずに日本語を喋っているのと同じことなのだ。

この二つの音をきちんと区別できているかどうかで、大体の英語力が判断できる。NHKの朝の番組の女子アナウンサーがMission Impossible を「インポシブル」と発音していた。ちょっとがっかりした。「インポッシブル」と発声しないと、英語力が疑われる。

今も続けているのかわからないが、「ことばおじさん」というMHKのある日の放映で日本英語と英語の区別を論じていた。simulationを「シュミレーション」と発声するのは日本英語で、「シミュレーション」が本当の英語の発声だと解説していた。衛星放送の番組表の中に意見を述べる欄があつたので、次のように送信した。

「シュミレーションだけでなく、シミュレーションという発声も日本語英語で、スイミュレーションと発声するのが英語発声です。NHKの番組でも、<セクシー部長>ではなく、<セクスィー部長>と正しく表記されています。それと同じです」。

この意見への回答はなかった。また、2006年の朝日新聞「私の視点」(8月5日付け)に「オシムはオスィム」を投稿したら、編集部いろいろな手紙が届いた。「イビチャ(揖斐茶)・オシム(惜しむ)」ではなく、「イヴィツァ・オスィム」が正しい発音で、「し」と「す」をきちんと区別しないと、理解不能になったり、失礼になったりするという要旨である。

幼年時の英語教育に賛否両論があるようだが、発音の習得は早ければ早いほど良いことだけは事実である。歳を取る毎に学習が難しくなる。私は高校時代と大学初年を通して、徹底して発音練習を行った。中学・高校時代の教育に、短時間で構わないから、人前でプレゼンテーションする授業を入れるべきだ。それは英語だけでなく、日本語でのプレゼンテーションについても言える。自分の主張を端的に人前で述べることは、グローバル化する世界に生きるための最低限の教養である。

(もりた・つねお)

## 私とハンガリー

漸くというか、遂にというか、日本へ帰る日が近づいてきました。ハンガリーに赴任して12年になります。皆さんからは、「長いですね。お勤めご苦労様、ハンガリーはどうでしたか」と言っていただけですが、今ではお勤めという感覚は薄れ、「ここで生きている」というのが実感です。ハンガリーの良いところ、好きでないところ色々ありますが、最近では声を出して論ずる気持ちにはなれません。お互いに問題点を修正しつつうまく付き合い、結果を得る努力をすることが大切で、そういう自然な関係をもてることに意味があると考えようになりました。たとえば言えば、自分の家族の良いところ、悪いところを論じてもしようがない。そんな心境と良く似ています。

私とハンガリーの関係は、物づくりから始まりました。文化・芸術・ビジネス(物品の売買)ではなく、経済活動の根幹である物づくりという分野です。製造業を立ち上げ、仕事を軌道に乗せるまで、実に多くの人々と付き合うことになりました。大卒のエリートから最低賃金で働く現場の人たちにいたるまで、幅広い層の人々と付き合うことが出来ました。これは製造業でなければ経験できないことでした。

そして、私は多くの日本人が住むブダペストでなく、そこから南に65kmほど離れた地方都市に居住しました。日本人家族との交流はほとんどありませんでしたが、その代わりハンガリーの田舎のふつうの人々と日常的な交流ができました。多分、ブダペストの生活では考えられないような、飾り気のないハンガリー人社会の中で生活させていただきました。

しかも、私には12年という時間がありました。数日単位の観光や短期の滞在と違って、実に多くの人々や地域とのコミュニケーションの時間をもつことができました。ゆったりとした田舎の空気の中で、実に濃い人と人との関係をもつことができました。こうした日常生活の中で、仕事で赴任しているという感覚は次第に消え、この町、この村に住んでいるという自然な感情が芽生えて

きました。

### 苦戦した日本の物づくり

日本の物づくりの出発は非常に厳しいものがありました。機械が動き始め、工場から出荷した製品は直ちにグローバル競争の真っ只中に置かれます。人間を生産工程のひとつの要素(道具)と捉えられる欧米や中韓の企業は比較的順調な生産活動を展開しているように思います。環境が全く違う海外での物づくりを始めるには、この手法は必須の条件であると思います。これを徹底することで欧米・中韓の企業は実績を挙げており、われわれが学ばなければいけない要素だと思っています。

他方、単一民族内で作り上げた日本の物づくりは、人間を労働環境の主要素においているために海外では常に苦戦を強いられています。日本の物づくりは「愛社精神」、「目標達成への使命感」、「チームプレイ」、「客先・組織への思いやり」、「改善・向上心」などメンタルなものをベースにしています。ところが、こうしたメンタルな部分の理解が不十分な中で成果・結果を求めると、管理・組織に混乱が発生します。私自身、欧米のマネジメント手法の一部は日本の物づくりとマッチングしない部分があると感じています。ISO等の近代的なマネジメント手法をしっかり具現化し、その上に日本の物づくりの思想を建設することが、日本の物づくりを成功に導くものと考えようになりました。そして、これが私の12年間の目標でした。

### 組織は上から作っていく

欧米の特徴である個人主義・職種職務の分業化のシステムには、各セクション内会議・関連職場会議・管理職会議・テーマ別社内会議等をもつことで対処してきました。チーム目標の設定・目標達成の為にチームプレイを毎日確認し合うこと、会議で全員が発言すること、各セクションの課題と今日の仕事を全社で共有しあうこと、会議のリーダーはチームプレイを具体化する

## 高根 友光

ことを常に追求しました。仕事の内容から離れたことでも、積極的に声を掛け合うこと、互いに挨拶をかわすことなどを奨励しました。無味乾燥な雰囲気では、高いメンタルを維持することはできません。こうやって、3年目で漸く日本の物づくりの基礎ができたように思います。これは我が社の財産ですから、当然、現在もなお、明るく気持ちよく働ける環境を維持するために、挨拶の励行を続けています。

他方、日本人赴任者には社内での歩き方・服装・姿勢まで注文をつけ、地元の街での振る舞いにも注文をつけました。会社幹部として、日本企業の代表する者として、常に衆目のなかにあることを意識してほしいと。日本の中間管理職の経験だけで海外へ赴任する者が多いので、ハンガリーでは経営幹部の一員であることの自覚を強く求めたわけですから。

なぜなら、企業管理者のプライドと納得できるリーダーシップは海外工場経営においては表裏一体の重要な要素だからです。ハンガリー人社員が日本人赴任者をリーダー・ボスと認めてくれるには実績と時間が必要です。それまでは一人前の経営管理者ではありません。その点からも日本人の赴任期間の長さは重要な要素で、多くの企業のように3~4年で交代させていたのでは、名実ともにボスとして認められる前に日本へ戻ることになります。「組織は上から作って行く」。これは先輩が私に教えてくれた格言です。

### 大切な人間関係

一流のアーティスト、アスリートあるいは日本を代表する大企業の創業者達は、自分の選んだ道・仕事が好きです。先人たちは私たちに「好きこそものの上手なれ」という言葉を残してくれました。これは仕事内容だけではなく私たちを取り巻く環境にも言えると思います。

皆さん、ハンガリーをどう思っていますか?この国に工場を作り、この国で生産活動をするのにこの国が嫌いだったら、上手

く行かないと思います。ハンガリーやハンガリー人を好きにならなければ、この国の人々を導くことができるでしょうか。そのように人にハンガリー人が心を許し、一緒に苦労をともにするのでしょうか。工場生産活動する社員の99パーセントがハンガリー人です。このチームメンバーが好きでなかったら、絶対に強いチームは作れないでしょう。

私はハンガリーやハンガリー人の良いところや好きになれないところをいろいろ感じています。全体としてかなり高いレベルでハンガリーやハンガリー人を好きになっています。どうしたら、ハンガリー人が好きになれるのか。それは分かりませんが、はっきり言えることは、労使関係だけをベースに人間関係を作っていたら、なかなか難しいと思っています。その逆に行く、つまり人間関係をベースに労使関係を構築する努力を

することがポイントではないかと考えています。これは12年間の私の教訓です。

労使関係をベースにすると、利害関係が大きな比重を占めてきます。労使の関係である以前に、我々はそれぞれ日本人とハンガリー人という個人なので、そういう個人関係を構築しないと、労使関係が信頼あるものになりません。

こういう実践の結果、今ではハンガリー人社員にたいへん助けられています。思いやりや心遣いを見せてくれる社員が大勢います。「以心伝心」。この気持ちの変化を社員は感じ取ってくれているようです。その影響かどうか判りませんが、我が社は近年多くのお客様から「A」ランクの評価をいただけるようになりました。日本・中国・アジアの各工場に負けないレベルに成長しつつあります。

### 自発性を引き出す

社員の自発性を引き出すことは、ハンガリーにおける物づくり、日本企業のマネージメントのキーポイントと思っています。「上から言われて実行する。決められた作業標準を無気力に実行する」。こんな文化がまだ色濃く残っているハンガリーですが、指示の仕方の工夫、自由に考えさせる時間をあたえること、批判だけでなく褒めることなど、いろいろ工夫することで社員のやる



気が生まれ、自発性が発揮されてきます。自発性が出るようになれば、ハンガリー人はすばらしい能力を発揮します。そこから、日本人にはない発想も出てきます。仕事も積極的に取り組んでくれるようになります。信頼関係が確立してくると、信じられないことかもしれませんが、思いやりや心遣いも寄せてくれるようになります。

この自発性は労働の質的変化を生み出しました。この自発性は日本の物づくりの根幹を形成し、ひいては人間性の向上に繋がるものと思います。歴史的に自発性を抑えられてきたハンガリーの人々が、この自発性の一線を乗り越えてくれるかどうか、当地での日本の物づくりの出発点であり、チャレンジだとも思います。

### 素朴で親切な人々

地方都市で長く生活したことでいろいろ

な体験が出来ました。外資系の大きなスーパーがこの地方都市にも複数出店され、なれない貨幣経済で家庭生活が翻弄されながらも明るく親切でした。子供たちはいつも「チョコレート!!」と挨拶を返してくれました。

ブダペストでは経験できない素朴なハンガリー地方社会の中で、12年間も生活できたことは幸せなことでした。製造業・物づくりを通してハンガリーに出会い、ハンガリーの人々の飾り気のない本当の姿と出会うこと出来ました。「物づくりは人づくり」を掲げる日本の製造業も試練のときを迎えています。最高峰のマネージメントであるが故に、その実現には難しさもあります。しかし、今では日本的な物づくりはハンガリーの人々に最適なマネジメントと確信しています。

これから帰る祖国・日本は地震・津波・放射能・歴史的円高に翻弄され、厳しい試練の渦中にあります。有効な手が打てない政治不在は危機的状況をより深化させています。何が出来るのか、思案しながらの帰国になります。

今日まで貴重な勉強をさせていただきました。赴任期間中は多くのハンガリーの人々に助けていただき、感謝しています。長い間、ご支援・ご指導を頂いた日本大使館の皆様・日本商工会の皆様、また懇意にいただき、ご愛顧を賜りました皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

(たかね・ともみつ 相川ハンガリー)

## 近況

如何お過ごしでしょうか。私ども後期高齢者兩人もそれぞれにわが身の老いを日々実感しながら、無事に生き永らえております。ここでは、季節のご挨拶の補足として近況を少しばかり、お便りすることにいたしました。

私は、すでに2004年3月31日をもって、一切の公職から身を退かせて頂くことにして、市井に退隠する老人の一人となりました。それまでにInternational Association for Research in Income and Wealthから贈られた名誉会員の称号と、文化経済学会(日本)の顧問という名誉職の立場を除くと、現在は全く当たり前の後期高齢者としての日々を過ごしております。たまたま去る11月末、来年は上記文化経済学会(日本)がその創立二十周年を迎えるとのことで、その前祝の行事の一環として、秋のシンポジウムが青山学院大学で開催されることとなり、その一つのセッションである「文化経済学会(日本)の20年を振り返る」セッションにおける三人のパネリストの一人として招かれました。その席上、私は大容量の統計データセットの解析方法における林(知己夫)およびBenzecri理論の応用の意義と可能性、および文化経済学研究の理論分野にとって、行動経済学的アプローチが特に重要であることの二つを強調する機会が与えられたことは大変に幸せであったと思っております。特に今年は、その行動経済学の生みの親であるKahneman教授による待望の単著 Thinking, Fast and Slow, Allen Lane, 2011 が公刊されております。年が明けましたらその勉強に取り掛かることになるだろうと楽しみにしております。

今年の五月、老人夫婦二人でイタリアのトスカーナを巡る旅を致しました。アレツォ、シエナ、フィレンツェの各都市にそれぞれ3泊ずつ滞在しながらの、気ままの旅行でありました。携行したJ.H.Plumb, The Penguin Book of the Renaissance, 1969に導かれるままにピエロ、デラ、フランチェスカ故旧の地サンセポルクロを訪ねる機会がありました。その市美術館でピエロの珠玉の傑作を鑑賞することができたこと

は申すまでもありませんが、街角の一角にピエロとその(数学上の)弟子ルカ、パチョーリ二人の記念像に接することができたことは全くの奇遇でありました。パチョーリは、「算術、幾何および比例総覧」(1494年刊)の著者として知られており、加えてその中において複式簿記の原理に関する最初の原理的解明を行っていることで不朽の名声を勝ち得たのであります。

シエナの大聖堂ではその一角に設けられたピッコロミーニ図書室で、後にピウス二世に登りつめるピッコロミーニ枢機卿の一代記を描いた画像の前を低回、言い知れぬ感銘を受けたのでした。上に掲げたPlumbの書物には、コンスタンチノーブル陥落以後の困難に立ち向かい、勃興するオスマントルコ帝国との対峙に明け暮れた末、非業としか言いようがない最期を迎えざるを得なかったこのピウス二世の生涯を叙述する一章が設けられており、格別に哀れを誘ったのであります。

アレツォではフランチェスコ教会を飾るピエロの制作による「十字架伝説」の連作フレスコ画にも再会致しました。同じ「十字架伝説」による連作フレスコ画と言いますと、フィレンツェのサタクローチェ教会にあるガッディの制作による連作フレスコ画が想起されます。私どももフィレンツェ滞在中の一日、そこを訪れたのですが、あいにく全面改修中で対面することも叶わず、落胆いたしました。総じて言うならば、今回の旅の大きな収穫は、やはりピエロ、デラ、フランチェスカと、その弟子ルカ、パチョーリの業績を追体験する旅であったと思わざるをえません。アレツォから少し離れたモンテルキの墓地礼拝堂にあるピエロの「出産の聖母」を観るべく、慌しく閉館間際の礼拝堂に駆け込んだことも、今となっては懐かしい思い出となりつつあります。アレツォを去る朝、泊まっておりましたホテルの5階屋上のテラスから北に見える大聖堂がある丘のあたりを遠望致しました。その時、その風景こそがピエロ描くところの「十字架伝説」を締めくくる「聖十字架の発見」の中に塗り籠められたアレツォの風景そのも

### 倉林 義正

のであったことを、深い感銘とともに、改めて脳裏に深く刻み込んだのでした。

すでに一年前のこととなりますが、Economist誌11月 20-26日号の誌上に Japan's Burdenと題する長文の特集記事が載せられたことをご記憶であろうと思えます。日本における急速な人口構造の高齢化が、経済成長の阻害、若年労働者への就業機会の喪失、社会保障システムの崩壊を招きつつある現実を統計数字に基づき、実証的に解き明かしてくれました。私はこれをこれからの日本経済にとり、無視し得ない、厳粛な警告であると読みました。日本のさるジャーナリズムは、これをある囲みコラムの中で、「分かっているんですが」と茶化しました。だが、そうではないことは、現政権が「税と社会保障の一体的改革」を目指して苦悶している現実を照らし、誰の眼にも明らかです。こうした苦境の最中で、さらに深刻な難問が突きつけられました。3月 11日に東北地方を襲った大震災です。

3月11日の震災は、われわれ日本人にとって、その長い歴史の中で体験した自然災害に関する記憶の奥底に刻み込まれた苦難への追体験と、それから派生する情動の深層を揺り動かすのに十分な出来事でありました。その余波は十ヶ月近く経った今もなお続いております。とおそらく更に長く尾を引くだろうと思われまふ。と申しますのは、すでに上に述べたような重荷が、そのまま重圧として押し掛かっているからです。われわれは、それら数多の重圧を乗り越えるために、長く苦難の道を歩むことを余儀なくされることになるでしょう。ヨーロッパの幾つか国で現に起りつつある財政と金融をめぐる危機的状況も、決して対岸の火災ではないだろうと思われまふ。以下の古人の言葉を引用しながら、皆様のご多幸を祈ります。

「天の道は利して害せず。聖人の道は為して争わず」(老子、第81章)

(くらばやし・よしまさ  
一橋大学名誉教授)

## 冬のハンガリー訪問記

### 和中 帛子

ハンガリーから戻った頃に僅かに芽吹いていた水仙が3月の声とともに蕾も膨らみ始め木々は芽吹き、草原には至るところ生まれただばかりの子羊が母羊と群れています。梢の天辺で鳴き交わす小鳥達の賑やかな囀り、枝から枝に大忙しのリス達。私達夫婦の暮らす田舎町、ロンドンから100 km以上を北上した当地もいよいよ春の兆しです。戻って未だ一ヶ月も経たないのにハンガリー滞在がもうずい分以前の出来事のように思い出されるのは、短い間にたくさんの経験を味わったから、そして、つい先日の雪景色がはるか彼方に思われる陽射しのせいかもしれません。

ブダペスト近郊の町、チョモル(Csomor)に住む友人夫妻に何度かお誘いを頂きながら叶わなかったハンガリー訪問がひょんな話のきっかけで実現したのは2月上旬のことでした。英国を発ったのは欧州異常寒波が報じられる真っ只中、日中でもマイナス8℃前後と聞いてびっくり!防寒衣類をかき集めての旅支度をしながら、これほど低い気温を未経験だった夫と私は案外と楽しみにしていたような覚えがあります。高台に建つ友人宅の居間からの眺めは、何も遮るもののない一面の銀世界、真っ白な庭に立つ何本もの果樹の裸木に花咲く頃や実りの季節が羨ましく想像され、そんな雪景色を心地よい暖炉のぬくもりの傍でのんびり眺めていると、昔、炬燵の中から雪の降るさまを見た時の幸福感に似た思いがしたものです。バスと地下鉄を乗り継げばブダペスト市内にも手軽に出られる地の利、友人が丁寧な説明とともに持たせてくれた地図を頼りに歩いてみればなかなか楽しく、覚悟していたせいかそれほど寒さを感じなかったのが不思議でした。

ブダペストを訪れたのは二度目、最初は10年以上も前、短かった滞在中に記憶に残るのはインターコンチネンタルホテルの部屋の出窓に寝そべりライトアップされた鎖橋と対岸にそびえるブダの丘を飽かず眺めたことくらい。先ずはその思い出の場所へとセンチメンタルジャーニー。何とドナウ河の川面は流水に覆われ素晴らしい雄大な眺めで思

わす息を呑みました。思いがけない展開に大感激・大満足、この季節に訪れた正解を喜んだひと時です。ハンガリーは温泉でも知られる国ということで訪問の大きな楽しみの一つでしたが、ヨーロッパでも最古のパブリック温泉として紹介されていたセーチェーニーは期待を上回るものでした。湯煙の中に浮かぶ建造物の荘重な佇まいを眺めながらの露天風呂・顔に当たる冷気の気持ちよかったこと!ひと昔前はもしかして貴族やお金持ちのみの入湯者限定だったかしら?自分は現代に生まれてヨカッタわ〜など、ふと思いつつ宮殿のような屋根を見上げておりました。屋内でも数種の湯に浸かり



サウナで汗を流し・と実にのんびりと贅沢時間を満喫。お肌はツルツル身体はホカホカ、久しぶりの湯上り気分でありました。

別にもう一つ訪れた温泉はこれとは全く趣を異にした浴場で、クロアチアとの国境にほど近いシクロシュ(Siklos)という町に所在。脱衣場など効率的で使い易いモダンな設備から近年にオープンした所のように思われます。広い屋内には心地よく寛げる湯がいくつもに区切られ、中でも特に気に入ったのは三方に壁を置き光度を落とした空間。湯かげんも程よい熱さでその薄明かりの中に身を置く心地から安らぎました。この寛ぎを味わえたのは平日の入湯で人が少なかったせいであったかも知れません。英国暮らしの長い私達にとって、これらの温泉体験は至福の時間であったこと共にハンガリーに住む日本の方々を大変羨ましく思ったことでした。

滞在の終盤に、有名なモハチ(Mohacs)

のカーニバル見物に足を延ばしました。祭りの様子はサイト上の即席仕込みで知った程度。何やら恐ろしげな面をつけた一群の迫力は写真で見ただけとは大違い。事前の勉強不足を反省し〔歴史上の出来事が起源となって続く祭り〕の由来を帰宅後に改めて再読しました。逆立つ髪のごとく長い毛皮から突き出た角に様々な形相の木彫りの奇面(Buso mask)なるもの、ハンガリー語ではどう読むのか知らないけれど、武装と読めばストーリーにぴったり当てはまると、勝手に納得気分。歩み寄ったBuso mask の大男と肩を組んだこと、飲みめ!の仕草と共に突然差し出された瓶の強い酒にむせたこと、歯を剥いた黒褐色のマスクの下から現れた顔の色白で優しいハンサムな風貌に意外な気がしたことなど、愉快的思い出を懐かしんでいます。

この祭りには〔冬に別れを告げる〕人々の喜びも加味されて雪の残る街中は何やら心浮き立つ気分が満ちていました。その夜はモハチからそう遠くないワイン作りで知られる村に投宿。斜面を背に細い坂道に面して色とりどりの小屋のような建物が連なり並ぶ風景は今までに知るワイナリーとは全く違う鄙びた風情でした。きっとハンガリーワインを飲むたびにこの景色が目には浮かぶことでしょう。今回は通り一遍の観光旅行ではなく友人宅に滞在させて頂き、我家のような居心地の中で現地の暮らしの一端を味わえた事は何よりの幸いでした。友人を通じてステキな人との出会いにも恵まれました。旅の間に唯一困ったのは言語です。街中を歩いても何も読めない聞こえない、そんな状況には比較的慣らされている私達ですがやはりもう一歩足りないもどかしさを感じたものです。それでも今回の旅でハンガリーはぐんと身近な国になりました。今まであまり目を向ける機会を持たなかったこの国について敬意を持って知るべきことも多いと改めて考えさせられています。お誘い下さった友人夫妻に感謝!

次は緑溢れる季節のハンガリーを是非訪ねたいと願っています。

(わなか・きぬこ ロンドン在住)

## 妃の街ヴェスプレーム便り その2

## 森林・狩猟専門鑑定人

森田 友子

まず、主人の職業は、前回ご紹介させて頂いた「もみの木」は副業で、表向きは、「森林・狩猟専門鑑定人 (igazságügyi szakértő)」という専門家。

裁判官や、原告側、または被告側の代理人である弁護士は、「法」の専門家であっても、「森林」の専門家でない為、森林に関する裁判を取り扱う時、森林専門家の意見書、すなわち「鑑定書」が、裁判の進行上必要になる。

鑑定人は、裁判において、裁判官の心証形成作業を一部補完する役割を果たす。刑事事件でも同様に、被害届出された事件は、鑑定人により裁量され、捜査のカテゴリが決定される。

この職業は、専門家の最高地位とされていて、強い調査権限を持っており、同時に責任の重い仕事である。しかし、聞いてみると、専門分野の知識や経験を駆使して立ち向かわなければならぬ難問も少なくないようだが、立ち足る状況の方が難しいのではないかと感じてしまう。以下、鑑定人の苦労話。

裁判で、鑑定書の内容について、どちらかの側が不満を抱き、「不服申立て」が行われた場合、新たに鑑定人が選定され、一から鑑定がやり直される。こうして裁判が一向に進展せず、5年以上前に伐採された半分腐りかけの木を鑑定しなければならないことは日常茶飯事。

一番多い刑事事件は、まき(薪)詐欺で、被害者は、冬の暖の為にまきを注文し、トラックで運ばれたまきを降ろしてから、きちんと並べて嵩をチェックする前に支払いを済ませてしまい、丁寧に積んだ後、量や質(種類)が騙されていたと気づき、警察に届けられる例。まず警察が、一通りの事情聴取や証拠採取をして資料を集め、鑑定人に依頼するのだが、鑑定人が、被害者を訪ね、専門家の視点から情報採取したい時には、まきの一部が既に灰となっていることも少なくない。

どこにでもある話だが、権力もしくは歪んだ理由で正当な裁判が行われていない

と思われることもある。ある別荘の垣根が、隣人によって勝手に剪定された。主人の鑑定では、有名な俳優である加害者に不利な結果であった為、主人は、植物の専門家であっても、庭の専門家ではないから、という理由で別の鑑定人が選定された。

そして、裁判官や弁護士、警察も厄介だ。鑑定書は、依頼側の課題に答える形で書かれるのだが、チンプンカンプンな内容を提起してくることがある。それでいて鑑定書の内容は、公正でありながら平易で法律家の理解しやすいものにしなければならないから、頭を悩ましています。

最後に、自然豊かなこの地方ではよくある、鹿と車の衝突事故の訴訟を紹介したい。数年前までは、野生動物の管理責任者、狩猟協会から、車の修理代が支払われた。しかし、今は、狩人が鹿を追って道路に飛び出した等の特別な理由がない場合、鹿に注意の看板の有無に関係なく、鹿の持ち主と車の持ち主は、双方の危険物体がぶつかってお互いに被害を被ったので、どっこいどっこいとなる。ようは自然の掟には逆らえないということだ。

主人にとって鑑定人は、国外での研究職を辞めてハンガリーに戻った時に就けるよう、コツコツ資格を取って準備していた職。でも、収入は不安定だし、報酬も割に合わない仕事なので、少しがっかりしているようだ。それでも、ダンボールいっぱいの資料が届くと、「自由が命」の主人は、拘束時間はないし、妻以外にボスは居ないし、何より仕事で好きな森に入って行けるから！と今日も楽しそうに箱を開けている。

一方、妻の私は、普段は、日本語を教えている。大学ではまったく畑違いの専門を修業したのだが、少し世界を覗いてみたい、という理由で日本語教師の専門学校に通い、今ではメインになりつつある。

それから、二足のわらじは主人だけでなく、私は、ハンガリーの国内旅行業務取扱管理者の免許を取得して、個人旅行や取材旅行のアレンジをしている。でも、この仕

事は、主人のもみの木のように、特に乗馬ツアーでは、馬場の下見、コースの企画や手配、外乗に同行することは、私にとって楽しみ以外の何ものでもない。ここのかわいい馬たちを、もっと多くの人に知ってもらいたいと思っているが、ここで語り出したら止まらないのでまたの機会にする。でも、もしどこかでチャンスがあったら、ハンガリーの素晴らしい自然のパノラマを、是非一度、馬の背から眺めることをお勧めしたい。

他には、ヴェスプレームには、八日友好協会があって、会員として携わっている。今年5月末にも「日本の日」文化事業を開催することになっているが、積極的な活動を展開している。この協会のメンバーは、在日暦10年以上の会長を始め、流暢に日本語を話せる研究留学経験者が数名、素人の域を超えた日本文化マニア、さらに、弁護士と会計士までもが愛日家として自分の意思で参加下さっていて、非営利団体としては贅沢な凄いメンバーが揃っている。未知の可能性が埋まっているチームである。その中で、私は、唯一ホンモノの日本人として、少々監査役のような気持ちも携えて参加している。

また、ヴェスプレーム県は、岐阜県と姉妹都市で、長年に渡って国際交流が行われている。手助けできることは通訳以外にもあり、これまた活動的な岐阜県日八友好協会には、現地滞在しているからこそできることに、いろいろと関わらせて頂いている。

こうして列記すると、いろいろなことをしているようだが、この原稿だって、皿洗いの合間に考えてメモし、こどもたちが起きる前の早朝、PCに向かってできあがったもの。やはり主婦の仕事が大半を占める。

学生時代のキャリアを積んだ都会の友人たちなどは、帰国の度に、日本人がどこにもいないヨーロッパの田舎で、私はどうやって退屈もせず毎日を送っているのか不思議がるのだが、この原稿を送ったら、少しは生活の雰囲気も理解してもらえるかもしれない。毎日とても楽しい!とはいえないけれど、こんな感じに過ごしています、とメールしてみようかな。

(もりた・ともこ ヴェスプレーム在住)

## Anima Musicae Chamber Orchestra

## アニマ・ムジツェ室内合奏団

井上 奈央子

若手のチェンバー・オーケストラが誕生して2年になる。Anima Musicae(アニマ・ムジツェ)という名前が音楽の魂という意味がある。昨年夏にウィーンの楽友協会で開かれた国際コンクールで優勝し、この春はハンガリーでのコンサートの他にドイツ・ハンブルグとクヴェートリンブルグでコンサートが予定されている。

14人のメンバーは20代中心でフランツ・リスト室内管弦楽団の音楽監督であるRolla Jánosの弟子が多く、その縁もあり私も昨年一緒に演奏をしている。指揮者は置かず、代表のG.Horváth Lászlóを中心に自分たちで音楽を舞台上で作り上げていく。

パート内でリハーサルをしたり、室内楽を演奏したり、ほとんど毎日顔を合せているのではないと思うほどだが、このチェンバー・オーケストラの面白い点は、本当に良いものを吸収したいという情熱に素直で柔軟であるということだ。自分たちが尊敬する音楽家たちに直にオファーし、指導を仰いだり、一緒に演奏したり、

作品を書いてもらったりして成長している。

このグループに関わることになり、ここに書ききれないが素晴らしい音楽家たちに接する機会に恵まれ私のハンガリーでの音楽世界が広がった。これまでコンサートで演奏を聴いて興味を持っていた音楽家と音楽を共有し、話をしてその哲学に触れられることは私にとって大きなプラスになっているように思う。

同じく学生時代に現在のリスト室内管弦楽団をスタートさせたRollaをはじめ、皆あたたかく献身的に我々の若いチェンバー・オーケストラに知恵を授けてくれる。

5月25日にはオーブダでヴァイオリニスト、Baráti Kristófとのコンサートがある。日本で読売交響楽団と共演した直後、今回彼はソリストとしてだけでなく指揮者、コンサートマスターとしての役割も担い、私達とリハーサルをして一緒に演奏することになる。



Anima Musicae Chamber Orchestra

<http://www.animamusicae.hu/>[info@animamusicae.hu](mailto:info@animamusicae.hu)

5月26日土曜日19時

バラティ・クリストフとアニマ・ムジツェ室内合奏団  
Óbudai Társaskör  
(1036 Budapest kiskorona utca 7.)  
J.S.バッハ オーボエとヴァイオリンのための協奏曲 ハ短調  
ビバルディ 4台のヴァイオリンのための協奏曲 短調  
コレルリ コンチェルトグロッソ op.6/12  
モーツァルト 交響曲 ハ長調 K.551 "ジュピター"

6月20日水曜日19時

アニマ・ムジツェ室内合奏団2周年コンサート  
Óbudai Társaskör  
Bújtás József 弦楽のためのファンタジア  
メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 二短調  
ブリテン シンプル・シンフォニー  
Horváth Béla (ヴァイオリン)

## 東京アールハーズ

黒のフェンダー・テレキャスター。私の宝物はこの1本のエレキギターである。大学の時にアルバイトをしまくって購入したもう25年以上も前の年代物だ。

学生時代同級生とロックバンドを組んでいた。学園祭や小さなライブハウスで時々演奏していた。卒業後、メンバーはバラバラになった。さすが東京である。当時同格だと思っていたバンドのいくつかはプロになり、若者達の熱狂的な支持を得ることになる。

卒業後は実家の京都に戻り仕事を始めたが、高校時代の友人と週末に貸スタジオで好きなロックを楽しんだ。黒のテレキャスターはいつも傍らにいた。その数年後、私はハンガリーで暮らすことになり、未知の世界の暮らしに慣れることに精一杯で、テレキャスターも日本においてきた。しかし、ハンガリーのロックバンドや時々来訪するロックスターたちのコンサートには足を運んでいた。その中でも長年憧れのローリングストーンズのコンサートのオープニング曲“Start Me Up”のイントロが、スタジアムからブダペストの町中に響き渡るほどの大音響で鳴り響いた時は鳥肌が立った。キース・リチャードの弾くテレキャスターだ。それは10代の頃初めてロックミュージックを聴いたときの衝撃と感動をまざまざと蘇

らせる程のインパクトがあった。これを聞いてもう一度ここでもバンドをしたいと思った。

その年の夏、実家にほこりをかぶって眠っていたテレキャスターを取り出し、弦を張って磨きなおし、ハンガリーに持ってきた。私はカラオケで歌うのも好きだ。ハンガリーに来た頃はまだカラオケがなかったのでウィーンまでわざわざ歌いに行ったほどだ。ここブダペストでもアジア人が経営する日本のカラオケができ、時々歌いに行っていた。しかし決して安くはない。ある日、歌っているときに友だちが言った。「バンドを組んで自分たちで演奏して歌った方が安上がりじゃない」

「3人ともバンド経験者だしやってみようか」  
こうして思いがけず日本人バンドを組むことになった。レパートリーはカラオケで歌うような日本のロックやポップス。世代や好みによって少しずつ違い、ボーカルは演奏曲によって入れ替わる。そんなバンドが誕生したのが2008年。バンド名は「東京アールハーズ」。ハンガリー語の「Tök Jól! (すごくいい、すばらしい)」と「Áruház (デパート)」を組み合わせて「すばらしいデパート」という意味にもなる。ハンガリー人の助っ人メンバーも入り、メンバーチェンジを繰り返しながら今は日本人3人、ハンガリー人1人の4人で活動している。

## 読書のススメ

子どものころから読書は好きでしたが、ハンガリーに来て、日本にいるとき以上に読書をしました。本を入手するのに決して恵まれた環境とは言えませんが、それがかえって私を本の虫にさせました。

あまのじゃくな私は、ベストセラーといわれる本はあえて読まない、本は借りるより買うなど、ややこしいこだわりを持っていましたが、ここではそうは言ってられません。おもしろいと勧められた本は「食わず嫌い」することなく、ありがたく貸していただいて読むことになりました。小学生から保護者の方まで、児童文学も時代小説も本屋大賞も、勧められるがままに読んでみた結果、多少好みは違っても、多くの人がおもしろいという本は確かにありました。ページをめくる手を止められない、という本にもいくつも出会いました。寝不足になるほど本に熱中してしまう、なんて幸せな

### 仲川 寿一

ポリシーは一応日本語の曲(オリジナルも含めて)をレパートリーにすること。外国語の曲でやりたい曲はたくさんあるのだが、ハンガリーの人たちに日本のJ ポップを紹介することを目的とするバンドということ。でもそんな大それたことよりもとにかく楽しもうというのが一番の目的。もともとカラオケ替わりに始めたバンドなのだから。

これまで6回コンサートをおこなった。地下のワインセラーを改装したライブハウスが会場だ。ロックンロールは本当に単純な音楽だ。不良の音楽とまで言われたが、音楽に縁もゆかりもなかった私に音楽の楽しさを教えてくれたのはロックだった。音楽の授業が苦手な楽譜なんて全く読めない私でも、自分で演奏し、ステージで人を楽しんでもらうことができる。10代に心ふるわせわくわくさせてくれるものに出会い、今でもその時の気持ちを持ってられるのは幸せかもしれない。60、70歳のおじいちゃんになってもロックンロールをやりたいものである。

ここハンガリーでバンドの仲間巡りに会い、黒のフェンダー・テレキャスターをまた蘇らせることができた。「東京アールハーズ」は今や私の宝物である。

(なかがわ・としかず 日本人学校)

### 野呂 依子

だ?」といいながら、魅力的な登場人物について話が盛り上がったのも思い出深いです。

ハンガリーの学校にはそれぞれの学年に応じた「課題図書リスト」なるものがあり、国の内外や時代を問わずいわゆる名作を中心にリストアップされています。映画や漫画化されたものを読んで済ます不屈きな生徒もいるとは聞きますが、「世界文学全集」的なものをさして読まずに大人になってしまった私よりも、彼らの方がよく知っているのかもしれない。名作も読んでみなくては…。

3年間のハンガリーライフはすばらしい体験でした。大変お世話になりました。

～ 花に嵐のたとえもあるさ さよならだけが人生だ ～  
日本に帰って、本屋さんに行くのも楽しみの一つです。みなさん、よき読書ライフを!

(のろ・よりこ 日本人学校)

### 緑の丘補習校

#### ゆっくり、あせらず

補習校に通い始めて2年が経とうとしています。

初めは、普段100%ハンガリー文化の中にいる我が子が、日本語に興味をもってくれるのか、抵抗はないのかなど、いろいろと考えてしまい、補習校やその他の日本語クラブなどに入る事さえ躊躇していました。そして一番の理由として、私自身が毎週末に連れて行く事ができるのかという事も課題の一つでした。

ですが、本人に「行って見たい?日本語や日本の事も知ってみたい?」と聞いたところ、幼いながらも「行って見たいよ。日本の事も知ってみたいよ」と言う返事が返ってきましたので、これは行かせなくてはという思いになり、補習校に通う事を決めました。

通い始めてみると同じ環境の中に居るお友達と出会えた事は、彼の中でも衝撃的だったようで、その後の自身の生活が変化していきました。それまでは、二重国籍に生まれてき

た自分という感覚がよくわからなくて、時には子供なりに迷いがあったようです。それが補習校に通う事によって変化があり、自分自身をどんどん理解して成長している彼を見ると嬉しくなります。補習校に通う事で、日本語がすごく出来ているかと言うと決してそうではなく、メインはハンガリーの環境なのでハンガリーの学校の課題などもこなしつつの日本語の課題をやる事を行っています。

本来なら両方こなしていかななくてはいけないのかもしれませんが実際に難しい部分もあり、全てをこなせないのが現状です。一時は強制して日本語の課題をする時もありましたが、あまりよい結果は得られなかったので、現在は自主的にやっていけるような方向で話をしたりしています。数年後は、そうなって欲しいという私の願望もありますし。

数年前まではハンガリー語で話してくる我が子に、私も、ついついハンガリー語で答えてみたり日本語で答えて見たりと、どっちつかずな生活が続いていましたが、最近では日本語での会話も成り立ってきて、流暢とは言えませんが、自分の言いたい事を日本語で長く伝えられる様にもなってきて、だいぶ安定してきたなと感じています。「もっと日本語を勉強させないと」と焦った時期もありますが、今は彼が日本語や日本の文化などを「もっと知りたい・やりたい」と思ってくれるような環境を作ってあげたほうが彼にあっていて、そういう環境を与えられるよう心がけています。

例えば、小学校に上ると同時に始めた「空手」も、その一つです。始めたきっかけは日本にいる従兄弟がやって、こちらにも同じ道場があり通える距離にあった事からですが、ハンガリー人の師範からも日本

人という立場でも彼を扱ってくれていて道場の皆さんが日本語を使っている部分(空手の型名や数え方、礼儀作法など)を、彼が日本語の発音で皆さんに教える役割を与えてくださります。そういった事から責任感や日本語を学ぶ意味というものを理解し自覚を持ちつつあるというのは、親として本当に嬉しい限りです。

一年に一度ですが、日本から師範が来ハンされて指導をされる際にも、師範の言っている事を誰に頼まれたわけでもなく通訳している我が子を見ると、二重国籍という環境が活かされている瞬間を感じる事が出来ますし、私から見れば我が子ながら羨ましく思います。

こういった場面が増えていくといいなとは思っています。その為にも唯一彼が日本を感じ・学べる環境を与えて下さっている補習校が、今では欠かせないものとなってきました。幸い本人も、補習校に行くことが楽しいと言って、金曜日の夜には「明日だよね?補習校。明日は、○○ちゃんや○○君にも会えるな～」と同じ環境の友達に会えるのも嬉しいようです。

先日、年度末に行なわれる学習発表会があり、彼のクラスは劇を披露してくれました。前もって頂いていた台詞を、本番の1週間前まで覚えられず、先生が短く台詞を作ってくれました。台詞が短くなった事がショックだったらしく、その日から本番まで短くなった台詞ではなく、元の台詞で自主的に覚えはじめました。

もちろん彼がそうしたいのならばと思ひ、私も時間を作って一緒に練習をしました。結果彼は、発表会当日、すべての台詞を言う事ができました。私もびっくりしましたが先生もびっくりして「どうやったんですか?」と聞いてくれた程、褒めてくれました。理由はただ一つ、彼が自主的にやりたいと思ひ、それが実践に繋がっただけの話なのです。その時私は、やりたいと思わせる環境を作ってあげるのが大事なんだと感じましたし、今までの事を反省しました。周りのお友達と比べがちですが、実際本人がそうしたいと思ってくれないと実践にも繋がらないのだと改めて考えさせられました。

今までもこれからも、本人が両国の言葉も文化も、なるべく良い状態で学んで身に付けられるようにサポートしていけたらと思います。ハンガリーの学校の友達が週末遊べるところ、彼らは週末半日を日本語の学習に費やしている事に対して、私の周りのハンガリー人や学校の先生からは、批判的な声もあります。ですが本人が行きたいと言っている限り、私は補習校に通わせたいと思いますし、それまで身についたものが彼の人生に有効的になるようサポートし続けたいと思っています。

(くわな・かずえ)

## 私のボランティア体験記

ハーモシュ・エステル

平成23年3月11日に発生した日本における観測史上最大の規模、マグニチュード9.0という大地震は、死者、行方不明者2万5千人を超える未曾有の大災害となりました。「自分に何ができるのか?」母国から離れて活躍されている皆さんもきっとその思いに駆られたことがあるのでしょう。ここでは、この場をお借りして、在日留学生として参加させていただいたボランティア活動についてご紹介させていただきます。

金曜日、東京を出発するのは22時過ぎ。被災地へ向かう間、高速道路を走りながらまず驚かされたのはトラックの多さ。週末ということもあり、ワンボックスカーに大量の荷物を積み被災地へ向かう車も多く目に入る。荷台に「ガンバレ日本」「皆で日本を再生させよう」といった横断幕を付けて走るトラックもあり、高速道路を走行しているだけでも日本中の人達に震災復興に向けての思いがあることに改めて気付く。自分も被災地へ向かう身であるが、日本全国、また全世界からの応援の手がこれほど多く集まっていることに感激し励まされる。

バスは山道の最後のカーブを曲がり、目の前に海が見えた途端、車内から一斉にため息がこぼれる。目に写るのは地震の影響と思われる倒壊家屋の列。さらに進むと、突如として 眼前に広がる折れ曲がった線路上にひっくり返っている軽自動車、住宅に突き刺さっている漁船。あまりの光景に一瞬息を飲む。焼け野が原になった街並み。走り回る自衛隊の車。これは戦争で空襲を受けたあとだろうか?どこを見渡してもその光景が待っている。果たしてここは本当に日本なのか。悲惨な被災地の状況を目の当たりにし、ショックを通り越し、ただただ茫然と車窓越しにその光景を見ている。

東日本大震災から、約2ヵ月。テレビで流れてくる映像やネットから伝わる情報に衝撃を受け、「自分に何ができるだろうか」と真剣に考えはじめる。「自分にできること」は人それぞれ。募金をする、いつも通りの生活を続けて経済やライフラインを維持する、お金を使い世の中を元気にする……などあるが、なんといっても最大の行動は、ボランティアとして被災地に赴くことに違いない

と悩んだ末、気が付く。「事情も分からないまま赴くと逆に迷惑をかけてしまうのではないかと憂慮はしているが、「日本の復興に役に立ちたい」、「私が日本にいる時に限ってこんな大震災が

起きるとは、本当にただの偶然の一致だけなのだろうか。助けを求めている人を助けに行くのが私の一時的な使命になっているのではないのだろうか。」「これまで大変お世話になった日本の皆さんに少しでもご恩返しできれば」というような思いの方が圧倒的に強い。早速、インターネットでボランティア情報を調べると、全国大学生生活協同組合連合会が大震災の復興支援の一環として「週末ボランティア」を計画していることが分かり、応募する。被災された方々は、ほぼ全員が心に深い傷を負い、被災して間もない頃はまだ余震も多く、避難所環境も良くないことから生活ストレスが溜まっている。感情の表出がうまくできない、恐怖感に覆われている子供達の数も極めて多いという情報を踏まえ、私が参加を希望したのは、未曾有の大災害によってあまりにも多くのものが失われた被災地において、子どもたちの心身の健康を支えるために展開されてきたボランティア活動である。

現地の被災状況の説明を受け、班ごとに打ち合わせを行い、活動を開始するための移動中、海沿いで目に入ってきたのは2階建ての養護学校。下のほうだけでなく2階部分まで破壊が著しく、屋上部分に漁船や車が載っていることにあまりにも仰天し、案内の方から「当時ここは40名の入所者がいたが、助かったのはたった14名足らず。職員さんの中も犠牲になった方が何人かいる」と聞かされ、その場で全員手を合わせ、無言のまま活動場所へ急ぐ。

子供たちが楽しいひとときを過ごせるよう、お絵描きのサポートをし、遊び相手をするにより、「口数が少なかった子どもたちが明るくなったり、自信がついたり、会話も増え、良い変化が見られた」と現地の教員にも評価をいただいた。

今回のボランティア活動では一般家庭の家財道具の運搬や避難所の子どもたちの遊び相手などをするにより、被災地の皆さんの厳しい状況下でも必死に生きようとする姿を見ることができた。時間が経つごとに、自分の中に生まれて初めて心から「人のためになりたい」というボランティア精神が培われたともに、人生観にも変化が生じたのではないかと感じるようになってきた。「これからも心から被災地の復興を願うとともに、遠く離れていても気持ちは一つにして前に進んでいきたい」というのが、自らに誓い、言い聞かせた言葉である。

自分のボランティア経験について書いたら、私が偉いことをし、皆さんに感謝して欲しいという、私が全く思っていないことになってしまうのではないかと心配しましたが、腹を決めてこのテーマにさせていただきました。このテーマにしたことでもっとも言いたかったのは被災者の方々からいただいた温かい気持ちに、また日本人が困難の中でも前向きにお互いを助け合おうとしている姿にあまりにも感動したことです。それをどうか皆さまにもお分かりいただければ幸いです。

## 見えない「しめ縄」

ベシェニエイ・バラージュ

日本語を勉強し始めたのは、もう6、7年前のことです。理由は特になくて、本当になぜか分かりませんでした。日本文化や日本語の何か見えないロープが引っ張ってくれたような感じがしました。日本関連の展覧会に行ったり、日本の歴史に関する本を読んだり、日本についての映画を見たり、和食を食べたりした時、いつも日本の伝統的な倫理観の価値体系を感じて、日本は素晴らしいと思っていました。そのころの日本についてのイメージはおそらく単に理想的なものでした。昔の武士道に従いつつ、近代のハイテクな実業界にも通用する侍という、神秘的で、幻想的な遠い世界のイメージでした。

Keleti Nyelvek Iskolájaという語学学校で一年間半ぐらい日本語を勉強したあとで、国際交流基金の日本語講座に通い始め、結局その2年後に、初めて日本を訪れることになりました。日本政府による「Study Tour of Japan for European Youth」というプログラムのおかげで十日間を日本で過ごし、日本にもっと近づくことができました。その夢のような十日間では、東京、京都、広島などに行って、全部のことをちよつとずつ試して、頭にイメージがいっぱい渦巻くようになりました。例えば、茶道、生け花、歌舞伎、弓道、カラオケ、和太鼓、神社、お寺、城、寿司、すき焼き、お好み焼き、和菓子、もち、日本酒などを経験しました。ハンガリーに帰って来た後、日本についてもっと知りたいと思い、日本語ももっとうまく話せるようになりたかったのですが、やはり日本に住まなければ難しいと思っていました。

僕は建築学部の学生だったので、日本の建築、特に現代的なデザインにも当然興味がありました。だから、ブダペスト技術大学を卒業した後、日本に留学するための奨学金を探していました。運命のようにすぐ文部科学省の奨学金をもらえることになり、東京に住んで東京工業大学に通えるようになりました。今年に一月間、世界的に有名な藤本設計事務所でインターンシップをさせてもらったことは永久に忘れないでしょう。「東京での生活は毎日何か新しい事が発見できて本当に面白い」と聞いていましたが、これほどとは思いませんでした。日本の文化や和食も相変わらず大好きだし、自然や習慣や日常生活など、日本に住んでいなければ経験できないいろいろなことも好きになりました。一方で、美しくて親切な素晴らしい日本に対して、時々にぎやか過ぎる交通や、うるさくて失礼な日本のこともわかってきました。でも、この程度のことに慣れるのは、僕が日本で得たたくさんのことを考えれば手ごろな値段だと思っています。

東日本大震災が起こった時、僕は大学の数年前に補強工事をされたばかりのビルにある研究室にいました。だから、地震を体験したことがなかった僕でも、怖くありませんでした。僕は本当に運が良く、感謝していました。でも、ホームステイにも参加した



ことがあった東北では、たくさんの人が本当に大変な状況になりました。僕は、家族を安心させるために一ヶ月帰国した後、日本に戻った時に、絶対に日本のために何かしようと決めました。日本からもらった様々な経験は僕にとってとても大切なので、機会があるなら、ささやかなお礼の印として国を再建するのを手伝おう、というつもりでした。二週間に一回、週末に宮城県石巻でボランティア活動をやっているフランス人のグループ(在日フランス協会)があると聞き、それに参加するしかないと思いました。そのグループのメンバーはフランス人だけではありませんでした。毎回金曜日の夜に夜行バスに乗って、土曜日の朝にはもう石巻に着きました。土日には瓦礫を撤去したり、残っている家の中や庭を片付けたり、持ってきたおもちゃや家具や野菜などを配ったりしました。夜は自衛隊によって取りつけられた銭湯で体を洗った後、避難所とボランティアセンターになっていた石巻港小学校で、みんなで寝ました。センターの無料の自転車レンタルシステムのおかげで、破壊された海岸と河口を全部見て回ることができ、自然の力の恐ろしさを知りました。ボランティアには全部で3回行きましたが、僕にできたことは少なく、中途半端だったような感じがします。

どんなに一生懸命がんばっても、復興は長い旅になります。それに、二度と元の状態には戻れません。日本の将来にはいろいろな辛い時が来るかもしれません。でも、きっと、見えない「しめ縄」に助けられ、守られるはず。皆このロープにつながっています。

留学生自己紹介

新しい世界

リスト音楽院大学院ピアノ科マスター2年 若杉百合恵

ハンガリーに来て早3年目となりました。5月にディプロマを控え、いよいよ学生生活にピリオドを打ちます。

中学を卒業と同時に親元を離れ東京へ上京、大学卒業までの7年間を学生寮で過ごしながら、音楽にどっぷり浸かった生活を送りました。卒業を目前とした大学4年、日本の音楽大学院進学か、就職か、それとも「留学」という夢に突き進むか・・・とても悩み、迷いました。日本で長い間師事していた先生からは「あなたは留学するべき。日本の大学院に進学しては潰れてしまう」と、両親からは「ここまで頑張ってきたのだから、一度は海外に出してあげたい」と温かい支援がありました。それでも悩む私



に、兄は電話で「お前は海外に行って来い。大丈夫だから」と。大学を卒業すると同時に学び続けることを半ば諦めていた私にはあまりにも優しく、心強い言葉で、涙が止まらなかった事を今でも覚えています。

ドイツ・ロシア・チェコ・ハンガリーの音楽院のセミナーや試験を受け、留学権を獲得していました。幼少期よりハンガリーの作曲家バルトークの音楽に親しんでいた事、私が「留学」というものに対して抱く真意「何をどう学ぶか」を考え、「この先生の元で学びたい!」という想いからハンガリーに決定し、今に至ります。留学当初から私の中に「留学」という事へのはっきりとした目標やスタイルがありました。レッスンのみのパートタイム生として過ごした1年目は1日中ピアノ(音楽)だけと向き合える、好きなだけ弾いていられるという私にとっては夢のような生活で、観光もせずピアノに向かい、レッスンを心待ちにしていました。受け身ではなく、自分自身がその音楽をどう感じ取り、どう表現したくて、どうい音楽を伝えたい

のかという意思や考えを持ちレッスンに臨まなくては意味がないと思い、1回1回のレッスンを大切に、全力で自分の音楽を先生に伝えるよう心がけています。本人から生まれる音楽を重要視して下さるので、それが伝わるよう努力すれば先生は必ず応えてくださり、更に良い方向へと導いてくださります。私の「学び」への願望はあつという間に2人の素晴らしい先生によって叶えられ、

わずか3カ月で「満足、悔いはない!」と思ってしまうほどでした。半年ほどが過ぎ、籠ってばかりいた家から飛び出し、街を歩いたり、景色を眺めたりしながら改めてこの地にいる意味を考えました。レッスンを受ける事はもちろんですが、その地で生活をするという事の意味を考え、多くの事を五感で感じ、吸収していきたいと強く思いました。院生になってからはレッスンの他に授業もあり、思うように練習時間が確保できない事もありましたが、短時間でどう練習をしてどういう生活スタイルにしたらベストな状態でレッスンに臨めるかなど、1年目の生活リズムから一転してメリハリのある生活を心がけましたが、1日、1週間はあつという間に時間が過ぎてしまい、週末にはプシューっとバッテリー切れになる事も多々ありました(笑)

ハンガリーに来てからの一番の変化、それはやはり演奏です。私が日本で在籍していた高校大学は、実技試験にて基準点に

達しなければ演奏家コースからピアノ科へ転科という厳しい規定があり、今思えばかなりのプレッシャーの中でピアノに向かっていましたし、どんなに努力しても報われない事、努力だけではどうにもならない事が多く、ナーバスになる事も少なくありませんでした。しかしハンガリーに来てからはそれまでの事が嘘のように、演奏会でも試験でも、ピアノに触れ、音楽を奏で、表現する事がとても楽しく幸せに感じて、自分に与えられたその一瞬を、心から幸せに思い楽しめるようになりました。その変化は聴く人にも伝わるもので、一時帰国の際に再開した日本の先生からは「演奏が変わったわね。あなたの表情も明るくなったし、とても楽しそうね」と。完全ではありませんが、私が求めていた感覚に近い音楽を自然に自由に奏でられるようになってきた事、それを一緒に喜んでくれる人がいるなんて、私は幸せ者で贅沢

だな、と思ってしまう。今まで音楽の世界の中だけで生きてきましたが、ハンガリーに来た事で、他の分野で学ぶ方々や世界中を旅されている方々などに会い、それまで知る事もなければ触れる事もなかった世界を見る事ができました。それは私自身の人間としての成長にも繋がる素晴らしい出会いと経験だったと思います。学びに終わりはありません。学ぶことに恵まれたのですから、生涯学ぶ姿勢を崩さずに、自分が学んできた事、考えた事、感じた事、経験した事など一人でも多くの方に伝えられたら良いなと思っています。ここまで音楽の道を進んで来る事ができたのも、留学できたのも、そしてこの地で学び幸せな時間を過ごして行けるのは全て周りの方々のお陰です。学べる事、そして周りで温かく支えてくださっている全ての方に感謝致します。微力ではありますが、日々精進して行く事が恩返しの一つだと思ってこれからも努力して参りたいと思います。

留学生自己紹介

音楽と共に歩んだ3年間

リスト音楽院 ピアノ科 久野 絵美

ハンガリーの長く厳しい寒さもようやく終わり、心地よい春の日差し、匂いを感じながら、私はリスト音楽院に入学して3度目の春を迎えました。今私は街を歩いている時、ピアノの練習に励んでいる時、ふとした瞬間自分が音楽と共にこの地で歩んでいるんだと着実に感じます。

私が初めてブダペストを訪れたのは6年前、初めてのヨーロッパ旅行においてでした。また同じ年に現在師事しているファルバイ先生のマスタークラスを日本で受ける機会があり、当時、留学は遠い夢でしたがその後の自分に大きな影響を与える出来事でした。大学卒業後日本での留学試験を経て、尊敬するファルバイ、ラントシュ両教授のもとで勉強する機会を得たことは、何かハンガリーという国が結びつけた不思議な縁だと感じます。

こちらでの生活を始めた当初は色々な面で日本と異なり戸惑いでしたが、毎週熱心な指導のもと、音楽のことだけピアノのことだけを考えられる、充実した時間は自分の人生にとってかけがいの無いものとなりました。日本にいた頃はあまり意識せず弾いていたこと、楽譜を正確に読むことの大切さを改めて感じ、テクニックの使い分けや音の出し方、自分の音楽に対し絶えず追求し続ける姿勢など日々学んでいます。

そのほかにコンサートやオペラに気軽に足を運べる環境、ハンガリーの音楽を学ぶ上でハンガリー人なら誰でも知っている民謡、ダンスを身近に感じられ

ることからも、より自分の音楽に対する視野を広げることができました。また去年のリスト生誕200年のメモリアル・イヤーでは、日本ではあまり弾かれない晩年の作品、リスト・コンペティションでの友人や同年代の演奏家による演奏を聴いて多くの刺激を受けました。同じリストの作品でも演奏家ごとに様々な表現があるのはおもしろく、さらにリストが好きになった1年でした。

そんな中、去年の夏ケチケメートにあるコダーイ研究所のサマーセミナーに参加したことは私にとって、大きな変化をもたらしました。日本では絶対音感で教えることが一般的で、機械的な聴音の訓練、正確さが重要視されているため、コダーイ・メソッドで基本とされる移動ドやより音楽的に教えるソルフェージュ法は今までと全く違う世界でした。2週間、世界中から来た受講生と共にソルフェージュや合唱のレッスンを受けるうちに、和声や調性をただ分析するのではなく、自分の体を通して感じる事の大切さ、また日々のレッスンで指摘されることとつながっていることがわかりました。そして



ハンガリーでの3人目の先生、サボー・オルショヤ先生との出会いもありました。演奏

家として、どんな緊張する舞台でも自分の力を発揮するために何をすべきか、毎日の練習において自分を通してピアノを弾くということ、そして日々の生活と音楽はつながっているということ。ピアノを演奏する楽しさや音楽の持つ力について実感するようになったと共に、ハンガリーで学んだことをこれからどのように次の世代に伝え、社会に貢献していくべきか考えるきっかけとなりました。

また日本人としての自分について、東日本大震災以降見つけなおすようになりました。震災が起こった直後、私は日本にいなかったという罪悪感、何もできない、ただただ無力感に襲われました。しかしハンガリー人の友人達の日本への温かい言葉や活動を間近で見て、また音楽院の仲間によるチャリティーコンサートに参加したことで、日本から遠く離れたハンガリーで日本とどのように関わることができるか、客観的にみられるようになりました。震災から1年たった3月11日に、日本文化のイベントに参加しましたが、そのときに日本人の気持ちの強さや助け合うことの大切さについてハンガリー人による励ましの声が聞け、またハンガリーに住む様々な立場の方と共に日本に対する想いを共有でき、心が温かくなりました。

留学生生活も残り数ヶ月となり、今ハンガリーでしか学べないことを最後まで追求したいと強く思います。また日本にいる両親や毎月届く祖父からの絵手紙による応援の言葉を大切に感じながら、この貴重な時間を過ごしたいと思います。



## リスト音楽院留学生コンサート情報

♪4月11日(水)17:00 音楽歴史博物館バルトークホール  
 出演者:サバディ・ヴィルモシュ(Vn)白井 彩(Vc)岩崎 由佳(Pf)  
 曲目:ハイドン;ジプシートリオ、リスト;バラード2番 その他  
 入場料:1200HUF、学生・退職者600HUF  
 ※16時よりGombos Laszlo(音楽学者の第一人者)の案内による  
 音楽歴史博物館のご覧いただけます  
 Budapest, Táncsics Mihály utca 7., 1014  
[http://zti.hu/zti\\_uj/index\\_hu.htm?01](http://zti.hu/zti_uj/index_hu.htm?01)



♪5月5日(土) 16:00 旧リスト音楽院大ホール  
<http://www.lisztmuseum.hu/>  
 若杉 百合恵(ピアノ)大学院卒業コンサート 入場無料  
 曲目:スカラッティ:ソナタK.1&K.27&K.427  
 モーツァルト:ソナタKV.310 リスト:エステ荘の噴水  
 ショパン: バラード第2番  
 バルトーク:3つのチーク県の民謡 その他

♪6月1日(金)19:00 旧リスト音楽院大ホール  
<http://www.lisztmuseum.hu/>  
 岩崎 由佳(ピアノ)大学院卒業コンサート 入場無料  
 共演:サバディ・ヴィルモシュ  
 曲目:ハイドン;ピアノソナタ38番、リスト;バラード2番、  
 バルトーク;ラブソディー1番、ショパン;マズルカ、ピアノソナタ3番  
 お問い合わせ先:yukaiwasaki@live.jp



♪6月6日(水) 19:00 聖イシュトヴァーン音楽学校大ホール  
 永廣 まり(ピアノ)大学院卒業コンサート 入場無料  
 共演:ズグロー:聖イシュトヴァーン王交響楽団  
 Zuglói Szent István Zeneház Nagyterem  
 (1145 Budapest, Columbus u. 11.)  
 曲目:バルトーク:舞踏組曲 Sz 77, リスト作品, 他。  
 バルトーク:ピアノ協奏曲第3番Sz 119  
 リスト: ハンガリー幻想曲 LW-H12(S123)



## スポーツ・エッセイ

## 欧州スポーツ情報

盛田 常夫

ドルトムントの香川が好調だ。ドルトムントの選手が並ぶと、170cmの小柄な体躯は頭一つ分だけ低い。この小さな日本人プレーヤーがBundesligaのトップを走るボルシア・ドルトムントを牽引している。今年に入ってから、週間ベストイレブンに何度も選出され、欧州ベストイレブンにも顔を出した。日本での代表戦を終えてすぐの第24節のマインツ戦では決勝点を決めて、「ドルトムント優勝を決めるゴール」という評価を得て、週間MVPにも選ばれた。まだリーグ終了まで10試合も残しているが、この節で2位のバイエルン・ミュンヘンと3位のメンヘングラッドバッハがともに敗れたから、この節の勝利は大きかった。しかも、圧倒的に攻めながらチャンスを決められず、逆に同点にされた直後のゴールだったから、値千金のゴールだった。

ドルトムントの選手は若いから、90分間を通してよく走る。このチームで目立った仕事をして、さらに欧州のトップチームへ移籍したいと野望をもつ選手ばかりだから、ゴールへの執念が凄い。そういう激しい競争の中で、香川はチームに欠かせない主役の座にいる。

香川の特徴はボールの処理が速く、一瞬でチャンスを作るパスが出せることだ。他の選手は自分でゴールしたいという意識が強いため、どうしても球を持ちすぎる。ところが、香川はワンタッチでキラーパスをだす。この瞬間的な判断と位置取りが他の選手に比べて格段に優れている。ポーランドのFWレヴァンドフスキとのトゥートップ気味でゲームに入り、その後トップ下に位置し、二列目の左右を動きながらボールを処理する。真骨頂はペナルティエリア内に入った時だ。いつの間にか素早くゴール前に顔を出す。また、ドリブルで横に移動しながら相手DFを交わしていく姿はメッシに似ている。マインツ戦では何度かゴールチャンスを外したが、最後はゴール前に入ったグラウンダーをワンステップで決めた。

8万人を超えるドイツの大観衆の中で主役を演じる日本選手がいるなど信じられない。それも35万ユーロの端金で獲得したのだから、チーム経営者には笑いが止まらない。これにたいして、膝を痛めた本田は移籍に苦労している。今冬の移籍市場で最後までイタリアの名門ラツィオが交渉していたが、まとまらなかった。モスクワCSKAは本田の移籍金1000万ユーロに、年俸300万ユーロの2年分を足した1600万ユーロを譲らなかった。ラツィオの提示額との300万ユーロの差が、最後まで埋まらなかった。ラツィオは本田の怪我を当てにして値切れると考え、他方でCSKAは原価を割る取引を拒否した。本田には厳寒のモスクワより温かいイタリアが良いに決まっている。膝の調子が今一つだから、何としてもモスクワを出たいだろう。

久しぶりにスキージャンプが面白くなった。10年前は日本人選手が上位を占め始めたが、ここ4~5年はオーストリアの若手選手が圧倒的な強さを発揮し、トップテンに6人も7人も顔を並べる試合ばかりで、見る気もしなくなっていた。それでも、ジャンプ選手が1人しかいないスイスのアマンに、オーストリアはオリンピックで苦杯している。史上最強のオーストリアチームが、ノーマルヒルでもラージヒルでも、金メダルがとれない。ドイツのハンナヴァルトが絶好調で五輪を迎えた時も、アマンが立ちはだかった。だから、勝負事は面白い。

この冬のシーズンで選手動向が大きく変化した。オーストリアの選手が連戦連勝とは行かなくなった。伊東大貴が4勝し総合でも4位に入ったように、ノルウェイ、ポーランド、スロベニアの選手が優勝するなど混戦の時代に切り替わった。距離や飛型点に加えて、風の強さを加味する評価方法に変わったことも影響しているかもしれないが、混戦の方が観る方には面白い。女子のジャンプで15歳の高梨沙羅が活躍しているのも頼もしいが、如何せん日本のジャンプの競技人口が少なく、上位に続く選手がいない。ただ、それはオーストリアを除いて、他の国も同じようだ。誰もが簡単にできるスポーツではない。子供の時に習得できなければ、競技選手になることが不可能なスポーツだから、各国とも選手層の薄さ

や世代交代に悩んでいる。プロテニス界も長かったフェデラー時代が終わり、ジョコヴィッチ、ナダル、フェデラー、マレーの四強が競う時代になった。今年全豪オープン決勝は6時間近い激戦になったが、最終的にジョコヴィッチがナダルを下した。対ナダル戦7連勝と相性が良い。他方、フェデラーはナダルを苦手としている。室内の速いコートなら良いが、土のコートでは勝てない。フェデラーの片手バックハンドを狙って、高く跳ね上がるスピニングボールを集める作戦をとられるから、土のコートではどうしても勝てない。ウィンブルドンでも芝が揃っている時に対戦できればフェデラーは勝てるが、芝がすり切れて土がむき出しになると、もうナダルに勝てない。

このように、サーフェイスによって、勝負はかなり左右される。その意味で残念だったが、テ杯の対クロアチア戦の惜敗だ。アジアの強敵インドを下して、久しぶりにワールド・グループに入った日本。しかも、錦織だけでなく、添田豪、杉田祐一、伊藤竜馬が急成長して、世界ランクを上げてのワールド・グループ入りである。しかし、208cmの巨人カーロヴィッチ一人に負けてしまった。全豪でベストエイトまで入り、トップ20に入った錦織でも、室内の速いコートでは最初から分が悪かった。230kmのサーフェイスが好調だと、フェデラーやナダルでも簡単に勝てない。明らかに、サーフェイスの選択を誤った。テニス協会は土のコートを用意すべきだった。スペインチームは冬でも、得意の土の室内コートで相手を迎える。

1995年にハンガリーがワールド・グループ・プレーオフで強豪のオーストラリアと対戦した時のことだ。世界ランクで圧倒的に上位にあるオーストラリアにたいして、急造の柔らかい土のコートを準備して迎え撃った。当時、ダブルスの世界ナンバーワンを抱えていたオーストラリアを3対2で破るという番狂わせを演じた。これほどまでにサーフェイスは大きな意味を持っている。

# スポーツ行事・運動サークル情報

## ゴルフ部 2011年活動報告

<2012年度の活動、公式行事>

### ○月例会(何れもPANNONIA Golf Course)

- ① 3月25日(日) 08:30～
- ② 4月15日(日) 08:00～
- ③ 5月6日(日) 08:00～
- ④ 6月10日(日) 08:00～
- ⑤ 7月8日(日) 08:00～
- ⑥ 8月5日(日) 08:00～
- ⑦ 9月9日(日) 08:00～
- ⑧ 10月7日(日) 08:00～
- ⑨ 11月4日(日) 08:00～

### ○「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権

第16回(春季)4月中旬～7月下旬予定  
 第17回(秋季)8月上旬～10月下旬予定

### ○第6回PANNONIAワールドカップ:

欧州、アメリカ、韓国、日本選抜 5月26日(土) 予定

### ○第7回四カ国対抗戦:

オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー対抗戦 6月24日(日) 予定

### ○第3回年代別対抗戦:

30歳から60歳までの各年齢層による対抗戦(夏～秋頃予定)

### <部員募集>

目下約50名。月例会には毎回30人以上の参加者があり、海外駐在員生活ならではの異業種間の交友を楽しんでいます。女性部員も大歓迎します。

連絡先: 古城(西鉄) manabu.furuki-nnr@dachser.com

## テニス部

日曜テニスチームは初心者から経験者の約15名が参加しています。約30分のウォーミングup(各自ストローク)、その後4ゲームのダブルスの試合をしています。

場所: マッチポイントテニスコート

(マムートショッピングセンター近く)

<http://www.matchpoint.hu/english/main.html>

時間: 9:00～11:00

夏季シーズン参加者募集!2012年4月より夏季シーズンがスタートします。

ご興味のある方はぜひ以下にご連絡下さい。

代表: 的場: h-matoba@exedy.com TEL: +36-30-487-1970

## バドミントン部

中学校の体育館の2面を借りて、毎週日曜日に2時間程度の活動をしています。

毎回参加される方が、運動不足の素人おじさんに加え、女性と子供が数名で合計10名強です。その他、時々参加される方が10名強います。はじめの30分間は練習、その後ダブルスの試合を行っています。経験者が少ないので、週末の運動不足解消という気持ちで続けています。

ラケットは会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持ってきて頂ければいつでも参加可能です。参加費は、当面1,000HUF/大人(試合に参加しない子供はタダ)でやっています。

冬は参加者が増えて賑やかでしたが、夏になるとゴルフなどのレジャーで参加者が減る傾向があります。興味のある方は軽い気持ちで結構ですので、是非参加ください。

### ① 現在の部員数

大人: 12名(女性は3名)、他に時々参加の方が10名ほど  
子供: 8名(試合参加は1名、他は会場を走り回っています。)

### ② 活動場所と時間帯

日時 毎週日曜日の午後4時から2時間  
場所 中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)

### ③ その他の活動

ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会  
飲み会

### ④ 代表の名前と連絡先

代表 升谷裕司  
問合せ先 hujpbad@gmail.com

### 編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、

ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



## コルナイが綴る 20世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク  
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

# コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中! ◆定価 4935 円(税込) ◆A5判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



## 体制転換の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

### 第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

### 第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)

## なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円(税込) A5判

■ ISBN 4-535-78331-4

# 異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。

ハンガリーは20世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

## 体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

# ポスト社会主義の政治経済学

## 体制転換20年のハンガリー:旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円



インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

# 人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

**BYOOL SNS** (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

## 日記・エッセイ



自分のページを持てる。  
日記、エッセイ、ブログ、  
記録として。

## コミュニティ



同じ興味・関心を持つ  
仲間の交流の場。  
OB/OG会にも。

## 豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、  
そこから生まれる新しい  
発見や気づきが、  
人生を豊かに輝きあるものに。

## 安心・安全



無料会員制。  
SNSのメンバーだけが利用  
できるクローズドなサービス  
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

## BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かず優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

## さくら DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等  
名刺1枚からご希望の言語にて  
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、  
内装工事、翻訳から印刷まで  
幅広く受け承っております。  
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu  
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.  
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

[www.innerdesign.hu](http://www.innerdesign.hu)

## Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを  
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ  
ローバルな企画・マネジメント展開を行って  
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ/仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、  
各楽器講師紹介なども随時承っています。

### Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6  
Tel&Fax: +36-1-786-7846  
Mobil: +36-70-3815548  
e-mail: [propart@chello.hu](mailto:propart@chello.hu)  
web: <http://propart.client.jp/>

Propart